

【ロマーニヤ1945 蒼海の観測者】

shohmx13

「高雄が大破した、ですって!」

最初に報告を聞いた時には通信機の故障かと思っただ。でも欧州派遣からこっちカールスラント製の信頼性が高い物を使っていた上に、さっきまでも、そして現在も感度は良好。つまりそんな故障はありえない。で、次に疑ったのは質の悪い冗談だけれど、これもありえない。訓練とは言え任務中にそんな事やったら敵罰だもの。と言う事は、それは真実なんだろうか? でも、大和を旗艦とした遣欧艦隊主力は地中海の中でも安全圏を航行していたはず。そもそも遭遇するはずが無いんだから、ネウロイにやられるわけはないし……、事故でもあったのかな?

『マイティホーム〇一よりネウロイ〇一へ、緊急通信があつた様だが問題は無いのか?』

少し混乱して思考が乱れた所にブリタニア語の通信が来た。発信元暗号名はマイティホーム〇一―リベリオン空母エンタープライズ、つまりは合同訓練中の第五〇八統合戦闘航空団マイティウィッチーズの様だ。

「いえ、現在確認中です」

うん、一人であれこれ考えていても埒が明かないよね。横からの通信で少し冷静さを取り戻した私は、母艦へと状況の確認を行う事にした。

「ミハリ一番より、摩耶管制へ。状況の詳細を確認

させて下さい。場合によっては訓練を中断して帰還しますが……え? そのまま東進しろ? どういうことですか!」

これはちよつとよく分からない。洋上での緊急事態に、母艦への帰還じやなくて離れる方向へ行けと言ふ意外な命令。一体どうしろつていうのよ、コレ?

扶桑皇国海軍所属のウィッチである私、目時みはる飛行兵曹長は今、大西洋上空一〇〇〇mを独り飛んでいた。全身を包むのは着慣れた扶桑のセーラー服と、縛帯でしっかりと固定された背囊と軍刀、手に馴染んだ九二式七耗七機銃、そして零式水上観測脚。観測脚のその名の通り、私の装備するストラライカーユニットは戦闘を主眼として開発されたものじやない。本来は艦隊に随伴して、その砲撃の着弾観測を行なう為のユニットなのだ。とは言え、観測を行う場はもちろん戦場。そのために自衛戦闘を行えるだけの空戦能力を持ち、更には若干ながら爆撃能力まで持っているという万能ユニットだったりする。もちろん万能の弊害としてどつちつかずという感は否めないし、水上機で浮舟が付いている上に複葉という造りのせいで最高速は伸びない。でも、長く使っている私からすると、素晴らしいユニットだつて言い切れる。私はそんなストラライカーユニット零式水上観測脚——通称「零観」——を駆つて蒼穹を舞い、本来であればこの後の合同訓練でネウロイ役を務めるはずだったんだけど……これは非常事態発生

に付き訓練は中止つていう事?

『摩耶管制よりミハリ一番へ。訓練のネウロイ役には今、別の機を発艦させた。五〇八の司令部にはこちらから事情を説明する。ミハリ一番はそのまま東進してブリタニア領ジブラルタルに向かい、そこで補給と任務の詳細を確認し、次の指示を受けてくれ』
摩耶の側から私を示す符丁「ミハリ一番」での呼び出し。とにかく東へ向かえ、か。直接通信ではこれ以上は話せない、機密度の高い作戦つて事と理解。
「ミハリ一番了解。これよりジブラルタルを指します」

私は手持ちのコンパスと時計と太陽の位置から自位置を割り出し、ジブラルタルに向かって方位を変更した。

独り、早朝の青空を駆ける。

周囲数百km以内には誰もいない。高度一〇〇〇mから見渡す深い青の大西洋と群青の空、白い雲。そして、雲の切れ間から僅かに覗く欧州とアフリカの突端。独りは寂しいけれど、こういう空の孤独は嫌いじゃない。不謹慎かな? と思いつつも穏やかな空を往く心地よい飛行を楽しみながら、心の中で状況を整理する。

私の母艦である重巡洋艦摩耶は、同型艦の島海、駆逐艦島風他合計六隻の駆逐艦群と共に独立分遣隊を構成し、第五〇八統合戦闘航空団マイティウィッチーズを中心とした空母打撃群へと一時的に編入さ

れて演習を行なっていた。私はその演習の中で敵性勢力、つまりはネウロイの役を与えられて、空母群への低空侵入を行う予定だった。こういう役は、普段なら通常型航空機が担う事が多いんだけど、今回扶桑はともかくリベリオンやブリタニアにとつては下駄履きのストライカーユニットが珍しく思われたい、折角同行しているなら、ちよつと様子を見てみたい」との先方からの要望があつて私に白羽の矢が立ったというわけだ。

個人的にも、統合戦闘航空団に招かれるような、世界でも有数のウィッチたちとの模擬戦は楽しみにしていたんだけど、摩耶の姉妹艦である高雄の一大事となれば仕方ない。

三時間弱程度の飛行でブリタニア領ジブラルタルへと到達した。ここは本来ヒスパニアの土地だったのが、二〇〇年以上前からブリタニアが支配して今に至っているらしい。度々領土問題は持ち上がるものの、最近是对ネウロイ戦争の重要な拠点となっている事もあつて、その辺りは沙汰済みになっている。

無線で指定された水域へと着水。栈橋へ寄せると、駐在の武官が出迎えてくれた。こういった役職の人は權威に拘つて自分のところに脚を運ばせる人物が多いと聞いたけど、彼が特別なのか、それとも余程事態が深刻なのか。三〇代中盤と思われる精悍な顔つきの武官は、待機所へと向かう時間も惜しいのか、歩きながら話を切り出した。聞くに、やはり高雄は

大破したらしい。なんでも安全圏のはずの海域で強力なネウロイと遭遇したのだそうだ。

「大和や千歳、その他の艦艇は無事だったんですか？」

私は、勢い込んで武官に質問した。旗艦である大和の事も勿論心配ではあるのだけれど、空母への改装前、水上機母艦時代の千歳には暫くお世話になった事があり、思い入れのある艦なので、他の艦以上に心配になる。

「ふむ、千歳と千代田の航空隊に被害が出たものの、その場に居合わせた第五〇一統合戦闘航空団のウィッチによつてネウロイは撃墜され、高雄以外の艦艇の被害は極めて軽微だそうだ」

「そう、ですか」

航空隊の被害の度合いを正確に推し量る事はできないけれど、他の艦の損害が少なく聞いて少しだけ安心できた。

「こちらもう少し詳細を知りたいところではあるのだが、暗号文での簡単な報告しか受け取れていないのだ」

「いえ、仕方が無い事だと思います。それで、私の任務というのはどうなっているのでしょうか？」

「ああ、その事だが、君にはタラントに行つてもらう」

「タラント……ええと、ロマーニヤの軍港ですよね」

「その通りだ。半島をブーツに例えた場合、かかとの付け根辺りと言つた所か。高雄は今そのタラント

の船渠に入り応急処置を行っているが、オペレーションマルスへの参加は不可能と判断された。よつて同型艦の摩耶がその代理となる。そして、作戦参加の為の要綱が書かれた極めて機密度の高い命令書類があるのだが……、君にはこれをいち早く摩耶へと移送して貰いたい」

「了解しました。それと、オペレーションマルスというのはいったい？」

「現段階で君が詳細を知る必要はないが、ヴェネツィアにおける反抗作戦とだけ言つておこう。重要な任務だ。くれぐれも気をつけて行つて欲しい」

「了解です」

武官の言葉にそう返事を返しつつも、何となく釈然としないものが残る。任務の内容は理解できたのだけれど、こうした伝令的な任務であれば、同じ摩耶搭載の零式三座水上偵察機の方が向いているんじゃないかな……。

「この任務に当たつてだが、ネウロイとの接触が予想されている。よつてウィッチが適任と判断された。幸い摩耶には君という適任が居たという事だ」

武官が私の思考を読んだ様に補足を入れた。成る程、そういう事ならば合点がいく。

「了解しました。お任せください」

しっかりと背筋が伸ばし、かつちりとした敬礼を以つて改めて返答を行う。武官も私のその態度に満足したのか、小さく笑みを浮かべながら頷いた。

「では、具体的なルートの打ち合わせをしよう。こ